埼玉県日蓮宗青年会主催連続講座講演録

普賢菩薩の勧発のあとで

――持続する『法華経』――

岡田文弘

はしがき

筆者は令和三年度、埼玉県日蓮宗青年会主催の「法華経連続講座～伝えたくなる法華経～」（於・妙蔵寺）において講師を勤めた。同連続講座は法華十講の伝統を踏まえ、法華三部経の十巻を各回一巻ずつ取り上げ、全十回にわたり行われた。本講演録はその最終回にあたる第十回（二〇二二年三月十一日開催）の誌上再現である。

当該回はもともと『観普賢菩薩行法経』を主題とする予定だったが、実際には『妙法蓮華経』普賢菩薩勧発品第二十八や、敦煌出土の偽経、「霊山一会厳然未散」の成句についても扱うことになった。後に見るように、『法華経』の「エピローグ」部分を論ずることは、同経の成立史や受容史をめぐる諸問題の検討にもつながる。そこで当該回をここに講演録としてまとめることで、『法華経』の読解に際しての一種の問題提起とするものである。

一、『妙法蓮華経』普賢菩薩勧発品第二十八～死からはじまり、誕生で終わる～

本日のお話では、『法華経』のいわば「エピローグ」部分を検討していきますが……ご周知のように鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』以外の『法華経』テキスト（竺法護訳『正法華経』、闍那崛多・達摩笈多訳『添品妙法蓮華経』、サンスクリット本）は、普賢菩薩勧発品（に相当する品）の後に嘱累品が置かれ、これを最終章として締め括られております。

しかし（これもご周知の通りでしょうが）羅什訳のみ、嘱累品の後に薬王菩薩本事品・妙音菩薩品・観世音菩薩普門品・陀羅尼品・妙荘厳王本事品・普賢菩薩勧発品の六品（所謂「巻末六品」）が続き、かくして最終章となったその普賢品の「一切の大会皆大いに歓喜し、仏語を受持して礼を作して去りにき」（開結五九九頁）という末文で締め括られております。この末文は「簡潔な結びであり、『法華経』冒頭の物々しさとはまったく趣を異とする」（菅野［二〇〇一］八〇頁）もので、いささか唐突な印象を与えますし、そもそも羅什訳以外の漢訳にもサンスクリット本にも見られません。これも不審の一因といえます。

「羅什訳が古形を留めている」との説もありますが、[1] 羅什が嘱累品を移動させた結果、普賢品が最終章になったという見方も古来根強くあります（早くは『添品妙法蓮華経』序に「什又移嘱累、在薬王之前」（大正九、一三四下九―一〇）と述べられています）。

ところが羅什訳における普賢品を最終章とする采配は……経典における最終章の通例である「嘱累品」をさしおいている上、不審な末文が付加（？）されている事実を鑑みた上でも、注目すべき点があります。

いかなる点か……それが、普賢品の主役たる普賢菩薩そのものです。普賢は、六牙の白象に乗った姿で知られてい

ます。『法華経』にも「六牙の白象王に乗って」「白象王に乗って」「六牙の白象に乗って」（開結五九〇―五九一頁）とある通りです。

しかしこの「六牙の白象」というモチーフに関連するものといえば、普賢菩薩のみならず、それと並んでもう一つ有名な例がありましょう……それは釈尊誕生の伝説です。所謂「八相成道」のうちの第一「降兜率」の逸話は、釈尊が六牙の白象に乗って兜率天から降臨し、母となる摩耶夫人の胎内に入った（そして、その様子を摩耶夫人が夢に見た）というものです。[2] つまり「六牙の白象」は、釈尊の「降誕」を象徴するモチーフでもあるのです。

ここでついでに、最終章たる普賢品から冒頭部たる序品に目を転じてみます。序品の主題となるのは文殊菩薩が説く日月燈明仏の因縁譚ですが、その中で、日月燈明仏が「当於離放逸」（開結八〇頁）、当に放逸を離れよ、との言葉を遺し入滅するというくだりが出てまいります。

しかしこの「放逸を離れよ」との言葉は日月燈明仏の遺言ということになっておりますが、これは明らかに、他ならぬ釈尊の遺言……『長阿含経』が伝えるところの「無放逸」「不放逸」[3]……を踏まえたものです。[4] つまり『法華経』序品は日月燈明仏の遺言という体裁で釈尊の遺言を引いているのであり、したがって『法華経』は釈尊の遺言（ひいては釈尊の死）を冒頭に冠することで始まる経典だともいえるのです。

近年の研究では『法華経』が釈尊の生涯を描いた所謂「仏伝」の要素を持つとの指摘がなされています（岡田［二〇〇七］、平岡［二〇一二］等）。この指摘を念頭に置きつつ、前掲の普賢品と序品を見てみますと、『法華経』二十八品は釈尊の生涯を逆転させた、つまり釈尊の死（「当於離放逸」の遺言）から始まり、釈尊の誕生（「六牙白象」の登場）で終わる、いわば「逆次の仏伝」とみなすこともできましょう。

仏の死から始まり、仏の誕生をもって終わる……考えてみれば『法華経』は、仏滅後における仏教のありよう（その「令法久住」開結三三六頁）を主題とする経典であることは疑いありません。そうしますと、仏滅つまり「仏の死」から話が始まるのは相応しい趣向といえます。

そうして『法華経』は仏の常住不滅を説き（如来寿量品第十六）、また仏滅後の時代にも仏教が広まることを期し（「後五百歳広宣流布」開結五二九頁）、いわば仏の再臨と仏教の新時代の曙を説くわけですから、「仏の誕生」をもって締めくくるのも必然といえます。

そのような観点に立ちますと、「六牙の白象」の登場する普賢品が最終章に置かれたのは、『法華経』の主眼を表す非常に巧みな構成であり、宜なるかなと思われます。

とはいえ、やはり普賢品で『法華経』が終わることに納得のいかない向きは、古来大いにあったのでしょう。その証左が、普賢品の「続編」が続々と作られた事実です。今日では「法華三部経」として時に『法華経』の一部分とすら見なされてもいる結経『観普賢菩薩行法経』、そして敦煌出土の『度量天地品第二十九』『馬鳴菩薩品第三十』です。以下に見て参りましょう。

二、『観普賢菩薩行法経』から三大秘法へ

『観普賢菩薩行法経』は普賢菩薩をもって普賢品第二十八と連絡していますが、その題に「行法」と冠されているように、修行実践について多く説かれた経典です。

『法華経』の行法として最も有名な「法華懺法」は『観普賢経』を基に立てられています（「隋瓦官寺沙門釋智顗、

輙采法華普賢觀經及諸大乗經意、撰此法門流行後代」智顗『法華三昧懺儀』大正四六、九四九中一二）。したがって法華懺法は、普賢菩薩を本尊とします（「一心敬禮普賢菩薩摩訶薩……是法華懺悔主。行者當自作心、的對此菩薩胡跪説罪懺悔并發願等。」同、大正四六、九五二上二三―二四）。

更に『観普賢経』は、大乗戒の典拠としても用いられました。叡山に大乗戒壇を建立した最澄が「観普賢経等に云く、今釈迦牟尼仏を我が和上と為し、文殊師利を我が阿闍梨と為し、当来の弥勒、願わくは戒法を授けたまえ。十方の諸仏、願わくは我を証知したまえ。大徳諸菩薩、願わくは我が伴と為りたまえ」[5]（『顕戒論』大正七四、六〇八上一三―一六、原漢文）と述べている通りです。

今一度整理しますと『観普賢経』から、法華懺法・普賢本尊・大乗戒という、その後の（主に天台宗を中心とした）『法華経』の実践における様式が生み出されたのでした。

しかし更にここで踏み込んで言いますと……こうして普賢菩薩に託されていた『法華経』実践をことごとく、本門八品所説の地涌の四菩薩に取り戻させた人こそが日蓮聖人であり、その結実が所謂「三大秘法」といえるのです。「此の本門の肝心南無妙法蓮華経の五字に於ては……但地涌千界を召して八品を説いて之を付属したもう。……地涌千界出現して本門の釈尊の脇士と為りて、一閻浮提第一の本尊、此の国に立つべし」（『観心本尊抄』定遺七一二―七二〇頁、原漢文）という説示でもって、唱題を含む法華懺法[6]と普賢本尊は、地涌菩薩に付嘱された「本門の題目」と「本門の本尊」に取って代えられました。更には「本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字」（『法華行者値難事』定遺七九八頁、原漢文）との一言をもって、『観普賢経』にもとづく戒壇は「本門の戒壇」に取って代わられました。これこそ日蓮聖人が『法華経』実践の歴史に起こした、大きな転換だったといえます。

三、第二十九品と第三十品

しかし、普賢品の後を継承せんとしたのは『観普賢経』だけではありません。なんと、第二十八品に続く、幻の第二十九品・第三十品の写本が、敦煌から出土しているのです。それが『妙法蓮華経　度量天地品第二十九』『妙法蓮華経　馬鳴菩薩品第三十』[7]です。

大正新修大蔵経最終巻の第八十五巻「古逸部・擬似部」に収録されているこの二品は、どちらも天界と地界の構成について説いています。『法華経』について、修行実践についての補足が必要と考えた人が『観普賢経』を作った一方で、宇宙論についての補足が必要と考えた人がこの二品を作ったと推定されます。

『度量天地品第二十九』は『開元釈教録』に「妙法蓮華度量天地経一巻、亦云妙法蓮華経度量天地品第二十九」（大正五五、六七五中二五）とあり、『妙法蓮華度量天地経』という独立した一経として成ったようですが、第二十九品として（すなわち羅什訳『妙法蓮華経』の普賢品第二十八につづく品として）受容されたことが分かります。

この度量天地品の冒頭は、『観普賢経』のような「仏語を受持して礼を作して去りにき」（開結五九九頁。前述のように、羅什訳の普賢品の末文）を受けての場面転換（「大林精舎・重閣講堂」開結六〇〇頁）こそありませんが、「爾時觀世音菩薩摩［訶薩？］……合掌而白佛言、世尊、我等無量諸菩薩衆并及一切諸天人等、以於佛前廣聞諸法敷演解説妙法華經、心淨踊躍得未曾有。」（大正八五、一三五下一三―一七）との振り返りがあります。

こうして度量天地品第二十九が成った後、そこへさらに第三十品として馬鳴菩薩品が作られてしまったのです。では、これら第二十九品・三十品は、いつまでに・どの程度流布していたのでしょうか。

度量天地品については、『法華経』を基に偽作された『太上中道妙法蓮華経』という道教経典から窺い知ることができると指摘されています。[8] 話は北周の時代に遡ります。武帝による廃仏（西暦五七四年）の直前、儒教・仏教・道教の三教が、自派の正統性を主張し、論争になりました。この論争は結果的には儒教の勝利とされ、くだんの五七四年の廃仏につながり、また同様に道教も弾圧されることになるのですが……その論争の最中、天和五（五七〇）年、道教側は自身の優勢を示すため急遽、経典を大量に偽造します。なんと短期間のうちに一千巻以上も作ったと伝えられています（「以天和五年、於花州故城内守眞寺、挑攪佛經、造道家僞經一千餘卷」（『唐護法沙門法琳別傳』大正五〇、二〇九中一三―一四）。大変な突貫工事ですね。この時に『太上中道妙法蓮華経』も偽作されたらしいと、野村［一九七〇］は考証しています（七〇六―七一八頁）。[9]

その『太上中道妙法蓮華経』に、度量天地品からの剽窃があるのです（巻八「天地物像品第十五」野村［一九七〇］七一八―七二〇頁参照）。つまり度量天地品が「いつまでに、どの程度流布していたか」については、「西暦五七〇年までには、『妙法蓮華経』の一品と見なされて道教に剽窃される程度には流布・浸透していた」と分かります……[10] つまり「かなり流布していた」ということです。

ちなみに、この天和五（五七〇）年のほぼ同時期、ひいては若干後のタイミングで、観世音菩薩普門品第二十五の偈（普門偈）が訳出されたようです（そのせいか『太上中道妙法蓮華経』は普門偈を剽窃していません）。[11] つまり、奇しくも、観音菩薩を対合衆とする度量天地品は、普門偈に先んじて広まり浸透していたことになります。これは『法華経』由来の観音信仰をかんがえる上でも、興味深い事実でしょう。一方の第三十品の「馬鳴菩薩」（仏教詩人、もしくは『大乗起信論』作者の馬鳴菩薩？）については、依然謎が残りますが……。

四、霊山一会厳然未散

このように結経『観普賢経』や第二十九品以降が作られていった経緯を見ますと、二十八品の後も『法華経』は持続しているとの感を覚えます。まさに「霊山一会・厳然未散」（霊鷲山での『法華経』の会座は、まだ散会することなく厳然として続いている）というわけです。

ところでこの「霊山一会・厳然未散」というフレーズ、『法華経』を表す成語として比較的よく知られたものですが、禅宗で多用されていた文句で、我が国での初出も臨済宗の栄西（一一四一―一二一五）の『興禅護国論』となっております。[12]

しかしこの「霊山一会・厳然未散」の文句が禅特有の言い回しかというとそうではなく、そもそも唐代の『法華経』説話集である僧詳『法華伝記』に「霊山一会・現於空中」（大正五一、五七上六）という類語が出ておりますし、[13]天台宗の史観から著された『仏祖統紀』の文中（大正四九、二七四上一三―一四）にも「霊山一席・厳然未散」の文句が見えます。[14]

またこの文句は、日本では口伝法門において重用されました。中古天台の口伝法門に見え、[15]そして我々日蓮門下にとっては『御義口伝』に出ることで馴染みがあるところでしょう（定遺二六六八頁）。無論、こうした口伝法門は扱いが難しく、問題視され注意が必要なものも多いわけですが、しかしこの「霊山一会厳然未散」にかんしては先に確認したように、遡ってみるとそれなりの歴史がある成語であると見えます。

それではここで、先に挙げた文献の中でも『興禅護国論』を見てみましょう。日蓮聖人には「持戒第一・葉上房」

（断簡、定遺一九九九頁）と言われた栄西が著した『興禅護国論』は、同郷（岡山県）たる法然の『選択本願念仏集』と奇しくも同年に書かれ（一一九八年）、鎌倉仏教の火蓋を切りました（こうして『興禅護国論』と「南無阿弥陀仏」に始まる鎌倉仏教が、『立正安国論』と「南無妙法蓮華経」に集約されていくわけです）。当該の文は次の通りです。

「智者禅師……法華経を誦し、「是真精進・是名真法・供養如来」に至りて忽然として大悟し、自ら霊山一会厳然未散なることを見ると云々」（大正八〇、九上二二三―二二六、原漢文）

ここで述べられているのは、天台大師智顗（五三八―五九七）が南岳慧思（五一五―五七七）のもとで修行中、『法華経』薬王菩薩本事品第二十三の「是真精進・是名真法・供養如来」（開結五一五頁）の文を読んで初めて悟りを開いたという、所謂「大蘇開悟」の逸話です。この「大蘇開悟」の境涯にある智顗が心眼によって見たものこそ、霊鷲山で『法華経』の会座が散会することなく厳然として続いている「霊山一会厳然未散」の様相であった……というわけです。

この天台大師の境涯は、きっと日蓮聖人も共有していたことでしょう。御遺文を見てみれば、

「法華経を信ぜざる人の前には釈迦牟尼仏入滅を取り、此の経を信ずる者の前には滅後為りと雖も仏の在世也……我等法華の名号を唱えば多宝如来本願の故に必ず来りたもう」（『守護国家論』定遺一二三頁、原漢文）

普賢菩薩の勧発のあとで（岡田文弘）

『法華経』を信じない人の前では、釈尊は入滅している。しかし『法華経』を信じる人の前では釈尊はいまだ存命であり、「南無妙法蓮華経」の題目を唱えれば多宝如来が必ず来たりて、釈迦多宝・二仏並座の霊山虚空会が厳然として続いていくのである……。

また、信者の鑑であった阿仏房の死に際しては、次のように述べておられます。

「故阿仏房の聖霊は今いづくむにかをはすらんと人は疑ふとも、法華経の明鏡をもつて其の影をうかべて候へば、霊鷲山の山の中に多宝仏の宝塔の内に、東むきにをはすと日蓮は見まいらせて候」（『千日尼御返事』定遺一七六一頁）

阿仏房の霊は、霊鷲山にある多宝如来の宝塔の中におられる。つまり霊鷲山にはいまだ多宝塔が現前しており『法華経』の会座は厳然として続いているのである……。

したがって本日のお話は『法華経』の「エピローグ」部分の検討ということでしたが、結論としましては「『法華経』はエピローグを迎えることなくいまだ続いている」まさに「霊山一会厳然未散」ということになりましょう。『法華経』は今日なお続いている、だからこそ今日に生きる我々は『法華経』を主体的に受け止め、我がこととして読みこなしていかねばならない、そうすることで『法華経』を更に持続させていかねばならない……このことを、法華信者として肝に銘じることで、締めくくりとさせて頂きたく思います。

御清聴、ありがとうございました。

（テキスト）
大正新修大蔵経→大正
『真訓両読　妙法蓮華経並開結』平楽寺書店、一九二四→開結
『昭和定本　日蓮聖人遺文』身延山久遠寺（一九五二―一九五九）→定遺

（参考）
植木雅俊［二〇一八］『サンスクリット版縮訳 法華経 現代語訳』角川ソフィア文庫
岡田行弘［二〇〇七］「法華経における仏伝的要素」『法華文化研究』三三、一五三―一六五頁
河村孝照［一九七六］「度量天地品よりみたる法華経信仰」『法華経信仰の諸形態』平楽寺書店、三四七―三七六頁
河村孝照［一九八〇］「度量天地品・馬鳴菩薩品形成の背景」『法華経の思想と基盤』平楽寺書店、三八九―四三二頁
菅野博史［二〇〇一］『法華経入門』岩波新書
勝呂信静［一九九三］『法華経の成立と思想』大東出版社
野村耀昌［一九七〇］「太上中道妙法蓮華経」について」『法華経の成立と展開』平楽寺書店、六九五―七二三―七二三頁
林　鳴宇［二〇〇四］「宋代天台における禅宗批判の諸相：『釈門正統』・『仏祖統紀』を中心に」『禅文化研究所紀要』二七、一五一―一七五頁
平岡　聡［二〇一二］『法華経成立の新解釈：仏伝として法華経を読み解く』大蔵出版
弘海高順［一九八二］「口伝法門と大慧禅師：霊山一会儼然未散の句を中心として」『天台学報』二四、一五八―一六二頁
山田昭全・三木紀人（校注）［一九七三］『雑談集（中世の文学）』三弥井書店

〈キーワード〉『法華経』普賢菩薩勧発品第二十八、『観普賢菩薩行法経』、『妙法蓮華経　度量天地品第二十九』、『妙法蓮華経　馬鳴菩薩品第三十』、霊山一会厳然未散

注

（1）勝呂［一九九三］一七五頁参照。

（2）「爾時菩薩、觀降胎時至、即乘六牙白象、發兜率宮。……降神母胎。于時摩耶夫人、於眠寤之際、見菩薩乘六牙白象騰虚而來、從右脇入。」（『過去現在因果経』大正三、六二四上二〇―二五）等（山田・三木［一九七三］頁下参照）。なお、このように釈尊は兜率天宮から降誕するわけだが、そこで普賢品に兜率天信仰が説かれている（開結五九四頁）点も注目される。

（3）「去來行無常　現滅無放逸。是故比丘、無爲放逸。我以不放逸故自致正覺。無量衆善亦由不放逸得……此是如來末後所説。」（大正一、二六中一八―二一）

（4）「この「放逸にならず、精進せよ」という教えは、『マハーパリニッバーナスッタンタ』に見られる入滅時の遺教と同じ内容である。法華経作者は、それを忠実に踏襲している。……法華経作者は涅槃に入る時の釈尊の教え……を継承し、それを極めて重要視していたと思われる。彼らにとっては、ほかならぬゴータマ・ブッダの教えこそが、かけがえのない意味をもっていたのであり、正統なブッダであった。その延長線上に久遠の釈迦仏が出現するという願いが、法華経として結実したのである」（岡田［二〇〇七］一五六頁）

（5）出典は開結六四七頁。

（6）「一心奉請南無大乘妙法蓮華經」「一心敬禮大乘妙法蓮華經」（『法華三昧懺儀』大正四六、九五〇下一七／九五二上七）

（7）大正蔵は「明」に作る（大正八五、一四二六上一二）。

（8）野村［一九七〇］・河村［一九七六］参照。

（9）なおこの『太上中道妙法蓮華経』以外にも、道家が『法華経』を剽窃し経典を粗製濫造した例は伝えられている（「撮法華以道換佛。改用尤拙」道宣『廣弘明集』大正五二、一四一中一一―一二）。

（10）「天和五年（五七〇）の時点において、妙法蓮華経度量天地品は少くとも長安以東、華州の地にまで流布していたものであり……その流布された範囲および年次はやや広汎なものと考えざるを得ない。馬鳴菩薩品第三十についても、略ぼ同様であったと見たい」（野村［一九七〇］七二二頁）

「この度量天地品と同類の経典が道教経典において妙法蓮華経の一品として説かれていることは、あきらかに度量天地品の

流布が中国の大衆に浸透していたことをあらわす。道教は、仏教に拮抗してか、あるいは調和をはかったとしても、いずれにせよ中国民衆の支持をおおきくうけた度量天地品を見逃すことはできなかったと解すべきであろう」（河村［一九七六］三七五頁）

（11）野村［一九七〇］七一五―七一七、七二二頁

（12）弘海［一九八二］一五九頁下―一六〇頁下。

（13）弘海［一九八二］一五九頁下。瓦官寺にて天台大師智顗が『法華経』を講説した時、空中に霊山での法華説法の様相が現れた（「霊山一会・現於空中」）という。

（14）弘海［一九八二］一六〇頁上。なお『仏祖統紀』は「教禅一致という性格が備わった」（林［二〇〇四］一六七頁）とされる。

（15）弘海［一九八二］一五八頁上―一五九頁上。